

## 稀書翫味の交遊圏（一）

Research on the network of the Japanese bibliophile of Meiji Era

山本 和明

### はじめに

「翫味」とは、言葉や文章などの表している意味内容をよく理解し味わうことを指す。では、「稀書玩味」とは何の謂いか。この言葉、先例が存する訳ではない。そうした造語を表題に掲げた思いを、はじめに少し述べておきたい。今日の情報伝達を巡る電子化の波は、当然のように書籍の電子化を普及、加速させてゆくことだろう。対して冊子形態での書籍は、家庭のスペースを占拠するという側面がより顕在化され、ますます邪魔者扱いされてゆくに相違ない。昨今、たとえば冊子を裁断したうえでの電子化（PDF化）が個人レベルで行われている状況にあることは周知に属する（称して「自炊」という）。加えて、今般の痛ましき未曾有の大震災は、水害による書物喪失という以上に、モノを持つ事に対する懐疑の念を人々にもたらしたのではないだろうか。

こうした事態に直面した時、先人たちはいかに対処したのだろうか。歴史は次の発言を残している。

古老の話に由ると、維新当時江戸では、大八車に満載した書籍が、何貫何百文といふ端銭で売飛ばされ、大阪でさへ、八文字屋ものなど軟派の珍書が、漉返しに材料に潰されたといふ。真に古書の受難期であつたといはねばならぬ。(水谷不倒『明治大正古書翫之研究』昭和八年一月、駿南社)

私の知っていた酒井藤兵衛という古本屋には、山のようにつぶす古本があつたものである。何せ明治十五、六年の頃は、古本をつぶしてしまふ頃だつた。(淡島寒月『明治十年前後』大正十四年三月『早稲田文学』一二九号)政治上の混乱期や印刷形態の革新期などに、古き時代の産物である書籍が潰しかかられ、価値のないものとされたことが確かにあつた。その事情は異なるにせよ、今日もそうした受難期を迎えていると云つて宜しかろう。

しかし、その一方で、そうしたものを守り、保存に努めようとした人達がいこともまた事実であつた。たとえば、大正十二年の関東大震災の折などはそうした動きが社会的にも顕著に巻き起こつていたようで、多くの人が、喪失感を補填するかのように古き書物を蒐集し、その書物について調べあげ、私家版等で論じてゆく(このことは次回以降論じるつもりである)。このことも時代の趨勢として顕著だつたのである。

亡びゆく名所史蹟、廃れゆく風俗行事、敗残せる上方芸術、その一步一步薄れ行く影を眺めて、私は常に愛惜の情に堪えませんが、滅びゆくものは時の勢として如何とも致方がないが、せめて保存につとめたい、そして記録に留めて置きたい。

昭和六年一月一日に刊行開始された『郷土研究 上方』における、主宰者南木芳太郎(一八八二—一九四五)による巻頭言の一節である。昭和十九年四月、第百五十一号をもって廃刊となるまで、芳太郎は雑誌『上方』の編輯のかわらで、上方出身の学者、文人、俳人、歌人たちを広く顕彰し続けた。また、郷土芸能の復興に力を注いだことは夙に知られている。昨今、日記の公刊も開始され、その足跡を辿ることも可能となつたのは大変喜ばしい。

「書物」がモノとして余計なもの、邪魔者扱いにされるご時世にあつて、今一度先覚者たちの辿つた足跡、情報交

換の様相を垣間見てゆきたい。その検証も今日意義あることではないか、と思うのである。先覚者たちがのこした遺産を我々はどう引き継ごうとしているのか。書物をめぐる、書物を介しての人々の交流を、資料を挙げつつ呈示し、確認しようというのが本稿の目論見である。

本稿は、本年度公開講座「大阪から考える パート2」（主催人文科学研究所 於本町学舎・九月十七日）において、「稀書翫味のネットワーク―郷土本をめぐる先覚者たち―」と題して講演した際、作成したレジュメ、手控の講演ノートの冒頭部を基に公にするものである。肥田皓三氏の一連のご研究、山口昌男『内田魯庵山脈』などを踏まえ、取りまとめたもので、新見に乏しい点はお許しただきたい。

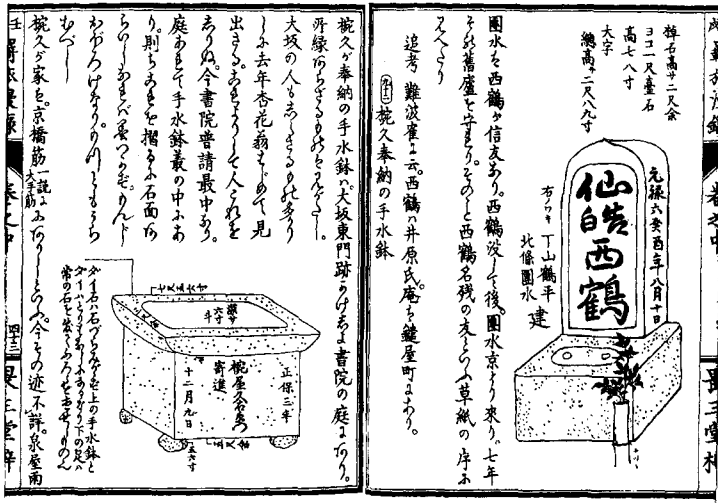
## 「西鶴」発見

近世上方を代表する作家と云えば、まず誰しも井原西鶴の名前を想起することだろう。その西鶴も、いわば明治の御世になって「再発見」された存在―その墓の存在と作品と―に他ならなかった。よく知られた事柄ではあるが、今一度そのあらましを振り返ることからはじめてみたい。

西鶴没後百余年あまりを経た享和元年（一八〇一）四月、蜀山人こと大田南畝が西鶴の墓を訪でている。

この寺に西鶴が墓ありと書肆山口屋がいへるによりて、墓はらふ下部にとふにしらず。つやつや墟墓の間を見るに一ツの石あり。仙皓西鶴とをれり。右のかたに元禄六癸酉八月十日としるし、左のかたに下山鶴平・北条団水建とあり。

「葦の若葉」写本六卷（「大田南畝全集」第八卷所収）は、銅座役人として享和元年から二年にかけて、大坂滞在中の南畝による名所遊覧記にあたる。その言に従うならば、「墓はらふ下部」も知らぬ無縁墓の中から偶然にも西鶴の



曲亭馬琴『羈旅漫録』

墓が見いだされたのであった。享保の改革時における好色本の禁止や、家を嗣ぐべき係累の絶えたがために、わずか百年余りの時を隔て、西鶴の墓でさえ詣ずる人を絶やしていたのである。

その翌年、曲亭馬琴は大坂の地を訪れるにあたって、南畝に上方への紹介状を書いてもらった(国会図書館蔵曲亭来簡集所載)。享和二年七月晦日、上方の慮橋庵に連れられ、馬琴は西鶴の墓を訪れている。

西鶴が墓誌 西鶴が墓は、大坂八町目寺町誓願寺本堂西のうら手南向にあり。七月晦日慮橋と同道にて古墓をたづぬ。はからず西鶴が墓に謁す。寺僧もこれをしらざりし様子なり。花筒に花あり。寺の男に何ものが手向たると問ふに、無縁の墓へは寺より折々花をたつるといふ。

団水は西鶴が信友なり。西鶴没して後、団水京より来り。七年その旧廬を守れり。そのこと西鶴名残の友といふ草紙の序に見へたり。

馬琴の発言には「寺僧もこれをしらざりし様子なり」とあった。先に南畝も「墓はらふ下部にとふにしらず」とした点を鑑みるに、いかにも脚色めいて感じられなくもない。馬琴

がこのことを記した旅行記を『羈旅漫録』という。

「羈の若葉」にせよ『羈旅漫録』にせよ、ともに我々は容易に読むことが出来る。ただこうした随筆は、そもそも写本として残されていたに過ぎない。特に『羈旅漫録』が広く世間で読めるようになったのは、明治のご時世に至つてからのことであつた。架蔵和綴本『羈旅漫録』三冊の奥書には「明治十六年三月八日版權免許、同十八年五月出版、同年五月二十日製本改御届、定価金九拾五錢」とあり、「著者故曲亭馬琴、校訂兼出版人渥美正幹、著者相続人瀧澤収」とある。他にもボール表紙装幀のものもあり、当時広く流布したようだ。実は、この明治期の刊行が書縁となり、「西鶴」発見―墓の発見―へと繋がつてゆく。刊行から三年あまりを経た明治二十二年一月二十五日に幸田露伴が、同年八月に尾崎紅葉が相次いで西鶴の墓へ訪ねている。

二十五日。大坂に到りて西鶴を誓願寺に吊ひ、「ほいかご」を天満宮近くに見、市中を逍遙して夜舟に乘じ伏見に至る。（幸田露伴「酔興記」『枕頭山水』明治二十六年九月刊）

愛鶴軒（淡島寒月）氏蔵の『好色一代男』は、予が西鶴帰依発心の種なり…略…明治二十二年八月、大阪八丁目寺町誓願寺に、西鶴翁の墓に詣で、でむしの石に鎚りて涙かな（尾崎紅葉「元禄狂」明治二十三年五月）

ともに愛鶴軒淡島寒月により西鶴を教えられ、その文章に魅了された作家達が、大坂の地に足を踏み入れるにあたり、掃苔に訪れたのであつた。露伴はこののち『小文学』（明治二十二年十一月）に発表した一文「井原西鶴を弔ふ文」で、西鶴を哀悼して已まない。

斯に來つて翁を吊へば、墓前の水乾き枯れて、鳥雀いたづらに噪ぎ塚後に苔黒み、霜凍りて屐履の跡なく、北風恨を吹て日光寒く、胸臆悲に閉ぢて言語迷ふ。ああ世に功ありて世既に顧みず、翁も亦世に求むるなかるべし。翁は安きや、翁は笑ふや、唯我一炷の香を焚き一盞の水を手向け、我志をいたし（幸田露伴「井原西鶴を弔ふ文」）

従前指摘されるように、西鶴文学との邂逅が淡島寒月の紹介によるとしても、掃墓のために誓願寺へといざなつたのは『羈旅漫録』の公刊があつたからに違いない。露伴、紅葉に遅れ大阪の木崎好尚もまた西鶴墓を訪れたが、そのことを裏付けるように、紹介記事文中に『羈旅漫録』の書名を記している。いまその「読売新聞」明治二十二年十一月十四日記事をそのまま掲げておこう。

○西鶴の墓 大阪 木崎好尚

西鶴翁が才名は東京諸文人の間に持てはやされをれど当地にても亦た斯の道の先導者として評判いと騒がしく聞えぬ、されば享和のむかし馬琴翁は浪華にあそび初めてその墓石のあるところを世に公けにしてこれをその羈旅漫録に載せ西鶴の名殊更に世に聞えその墓所を知り得てしかば余も一たびはこれを吊はんと欲せしかどもしみじみと思ひ立つほどの念も起らで過ぎたりしにこのごろに至り何となく有りがた味を感ずることの深くなり心いそしくす、みぬるものから急に墓詣でする事となれり墓は八丁目寺町誓願寺の入口右手の隅北向にあり（羈旅漫録には本堂西裏手三側目中程南向にあれどその後所換せしものにや）墓石の模様すべて彼の書にしるせるにたがはずきはめてみすばらしく二た目と見られぬ有様なりされど碑面にくゝり附たる塔婆あり之を覩れば東京なる露伴、紅葉二君の手跡とおぼしくそが来遊のみぎり立ち寄りて追弔せられしなり余はその善根に感じ又身後二百年を経て人のこれを弔らひ徘徊去るあたはざらしむる才士あるかと思へばいとゞなほ袖に涙の痕を止めぬさてその卒塔婆といふは

元禄の奇才子を弔ふて

九天の霞にもれてつるの声 露伴幸田成行

明治二十二年一月二十七日樹之

為松寿軒井原西鶴先生追善

明治二十二年八月二十六日 尾崎紅葉建之

少し正確に理解することが必要だろう。「羈旅漫録」に載せ西鶴の名殊更に世に聞えその墓所を知り得てしかば」とあるものの、繰り返すが『羈旅漫録』は、明治十八年にはじめて公にされたのだった。ややもすれば馬琴の発言以降、人口に膾炙していたかのように取り違えてしまうが、その墓も馬琴の来訪以降再び無縁墓として、「きはめてみすばらしく二た目と見られぬ有様」であった。さらに、木崎好尚が後に「浪華墓誌」（『なには草』所載）に語る処に拠れば「明治に至り、此石が無縁塔中におしこめられたるを、東京の露伴子、来弔して、これを見出し、資を投じて、これを抜き取り、別に門近き処に安ゑさせ」という。墓の位置が異なるのは露伴に拠ってなされた。このうち、誓願寺境内縮小による無縁墓整理など幾多の困難期を経ながらも、木崎好尚や南木芳太郎の尽力により、西鶴墓が今日に残されてきたことは肥田皓三氏の発言に詳しい。しかし、その契機の一つに『羈旅漫録』の公刊があることは忘れてはならない。木崎や恐らく露伴や紅葉も、謂わば『羈旅漫録』という書物の中から西鶴を「発見」したのであった。

### 西鶴・寒月・骨董集

それにしても、尾崎紅葉や幸田露伴に西鶴作品を呈示した淡島寒月は、いかにして西鶴を知ることになったのか。西鶴その人のことは、明治二十年代に至ってなお「斯の道の先導者」とのみ、上方の人のよく知る処でしかなかった。考えてみれば当然のことで、誰かに伝えなくては伝わらない。些細なことが契機となって、継承されていくこともある訳で、いま、寒月の発言からその諸相を確認しておきたい。

明治十三、四年の頃、西鶴の古本を得てから、私は湯島に転居し、『都の花』が出ていた頃紅葉君、露伴君に私

は西鶴の古本を見せた。（略）幸い私は西鶴の著書があったので、それを紅葉、露伴、中西梅花（この人は新体詩なるものを最初に創り、『梅花詩集』という本をあらわした記念さるべき人である。後、不幸にも狂人になった）、内田魯庵（その頃は花の屋）、石橋忍月、依田百川などの諸君に、それを見せることが出来たのである。

（淡島寒月「明治十年前後」）

この明治十三、四年頃の西鶴本入手に関しては、寒月自身が別の文中でも語ってくれている。

私が西鶴のものを見た最初は、今の酒井好古堂が藤堂家の隣家で古本屋をしていた時分、この店で『置土産』を手に入れて読んだのが始めでした。これを大変に面白いと思ったので、引続いてその後西鶴のものを漁って『二代男』『二代女』から『二代女』『五人女』の類、『武家義理物語』『一目玉鉾』『桜陰比事』『西鶴織留』『永代蔵』などというものを手に入れました。そうして一冊一冊と読んで行くごとに益々興味を覚えて、益々西鶴を慕うようになりました。そうして西鶴の肖像を写して部屋に飾ったり、その時分の号を愛鶴軒とつけた事もありました。（淡島寒月「西鶴雑話」大正六年六月『趣味之友』第十八号）

寒月自身からこのことを聴かされた内田魯庵も、同様のことを書き残している。

今の淡島町の酒井好古堂の先代が今三井の慈善病院になつてゐる下谷の藤堂の邸裏に小さな店を持つてゐた頃、薦縄からげの一と束の古本の中に「置土産」の零冊があつたのを反覆熟読したのが初めてださうだ。夫から以後翁は西鶴を探求して、獲るに随つて片端から耽読し、其頃までに大抵西鶴の全書を漁り尽してしまつた。（内田魯庵「淡島寒月翁の仙化」『紙魚繁昌記』）

寒月にとつての西鶴は単なる古典などではなく、反復熟読し、読み耽るものであつたようだ。何にそんなに惹かれたのか。寒月は次のように言う。

私は元来小説よりも、新らしい事実が好きだった。ここに言う新らしいとは、珍らしいということである。西鶴



の本は、かつて聞いたことのない珍しいもので満ちていた。赤裸々に自然を書いたからである。人間そのものを書いたからである。ただ人間そのものを書いたきりで、何とも決めていないところに西鶴の妙味がある。これは俳諧の力から来たものである。私は福沢先生によって新しい文明を知り、京伝から骨董のテエストを得、西鶴によって人間を知ることが出来た。(淡島寒月「明治十年前後」)

このように、寒月自身様々なところでこの「西鶴」体験を語っている。その時期も異なるゆえに、記憶も曖昧であるらしく、信憑性を考えるとき考慮すべき点もある。「京伝から骨董のテエストを得、西鶴によって人間を知る」ことの出来た寒月であったが、どうやら以下の引用をみるならば、酒井好古堂の店先で薦縄からげの一と束の古本の中に「置土産」の零冊を初めて発見したのではなかったようだ。上野の帝国図書館にて『置土産』を閲覧したことが西鶴の文才への関心の第一歩であり、さらに言えば、その前段階での山東京伝『骨董集』体験こそが、西鶴への興味を誘ったかのである。

今の上野の帝国図書館が聖堂の内にあつたのです。(略) 図書館で始めて西鶴の『置土産』をよんで、非常に西鶴の文才に感心しました。(淡島寒月「耽奇談」明治三十九年八月「趣味」第一卷第三号)

京伝の『骨董集』は、立派な考証学で、決して孫引きのないもので、専ら『一代男』『二代女』古俳諧等の書から直接に材料をとって来たものであった。この『骨董集』を読んでいるうちに、福沢先生の『西洋旅案内』『学問のすゝめ』『かたわ娘』によって西洋の文明を示されたのである。(略) 新しい文明をかくして福沢先生によって学んだが、『骨董集』を読んだために、西鶴が読んでみたくなり出した。が、その頃でも古本が少なかったもので、なかなか手には入らなかった。(淡島寒月「明治十年前後」)

『骨董集』を通しての「西鶴」発見ということを考えるとき、ここに云う「決して孫引きのないもので、専ら『一代男』『二代女』古俳諧等の書から直接に材料をとって来たもの」との発言に注目しておきたい。下手に取りまとめ

られた書物ならば、西鶴体験を寒月もできなかったことだろう。『骨董集』という書物が、ひたすらに原文を、図版も含め、写し取っているが故に、ゆかしくその時代の雰囲気を感じることができたのである（拙稿「京伝と和学」『江戸文学』十九号参照）。

一 なかむかしよりこなたのふみには。かなな・てにをはのたがへるはもとよりにて。そがうへにうつしひがめ  
けんとおもはるゝふし／＼さへ見えたるを。さながらあげて。いさ、かももじをひきなほせることなし。そはな  
か／＼にさかしらわざくはへて。ふるきすがたうしなはんをおおるればなり。（山東京伝『骨董集』上編後帙  
「おほむね」）

「いさ、かもじをひきなほせることな」い方針は、さかしらわぎを加えることで古き姿を失うことを畏れてのことであるという。そうした姿勢こそは、取りも直さず当時の一部の和学者の姿勢に他ならなかった。

およそ古書の旨を解かんには、かならずしも臆断をもて字を改べからず。ふるき真面目のまゝにて解べきかぎりは解あかし、おもひ得がたきふしはさてあるべし。（小山田与清『擁書漫筆』）

加えて、「蔵書家に因みて奇書を借抄し、或ひは博識に問ひ、或は故老に訊ひ、聞けば必識し、見れば必録す」という京伝の姿勢（馬琴『伊波伝毛之記』における京伝評）もそれに通じるものがある。京伝の姿勢を目のあたりにしてきた与清は、「ひろくまなび、あまねくとひて、なにくれとふるきあとゝもかうがへ得し」（『擁書樓日記』文化十三年五月廿三日条）といい、「世のなま著述家の類に似ず、そのあらはせる骨董集に孫引のひとふしだになきを見てもおもふべし」（『擁書漫筆』巻三）と述べていた。この「孫引のひとふしだになき」との表現は、まさに寒月の京伝『骨董集』評に等しい。京伝のこうした「考証」の精神は、実に明治時代に至つてなお脈々と影響をあたえていたようである。

さらに言えば淡島寒月も、実はそうした精神の系譜上に位置する人物であつたとは言い過ぎであろうか。先に引用

した「耽奇談」より、重複をいとわず今少し抜粋しておくことにしよう。

今の上野の帝国図書館が聖堂の内にあつたのです。そうして無料で閲覧させました。蔵書中には英語もあり、古書も沢山ありました。私が毎日そこへ出掛けて、種々な本を読んでいる中に、ふと『燕石十種』に出遇つたのです。始めて播く中に『戯作者六家撰』があつて、その中に京伝という名や、三馬という名が散見するのです。京伝、三馬などという名は、兄からかねがね聞いていた名だったから、何となくなつかしく思つて、一つ写し二つ写して『燕石十種』本六十冊の中、二、三十冊も写しました。その中に図書館で始めて幸田露伴君に遇つて、交を結んだのです。(略) 図書館で始めて西鶴の『置土産』をよんで、非常に西鶴の文才に感心しました。(略) 私には江戸文学趣味は、ほんの一部、他にいろいろな嗜好がありました。西鶴熱の盛んな頃に、一面に好古小録的の嗜好、即ちズット古い処の骨董趣味もありました。これは父の感化で、父は古い奈良朝物などの好古家でした。私にもこの癖があるのは偶然ではありません。(淡島寒月「耽奇談」)

帝国図書館に通い、そこで「見れば必録」、すなわち書写する日々。そのなかで始めて『置土産』に読み耽るに至り、露伴との交わりを結ぶことになる。書物と人との出会い——そうした希有な一時があつてこそ、紅葉・露伴などへの「西鶴」紹介がなされているのだ。いわば帝国図書館において寒月は知己を得て、交流を結んでゆくのである。それにしても、寒月は自身が読み耽り蒐集していった西鶴作品をなぜ惜しげもなくみせているのだろうか。

その頃はすべてが改つた。言い換えれば、悉く旧物を捨てて新らしきを求め出した時代である。『膝栗毛』や『金の草鞋』よりも、仮名垣魯文の『西洋道中膝栗毛』や『安愚楽鍋』などが持て囃されたのである。：旧物に対する蔑視と、新らしき物に対する憧憬とが、前述のように烈しかったその当時：(淡島寒月「明治十年前後」) 当時の状況が斯くの如きものであつたとすれば、こうした旧物に対する蔑視の風潮のなかで、寒月は同好の露伴を知り、蒐集した書籍をみせている。明治十四、五年以降、活版化へのシフトがなされていたことが夙に知られている

が、その状況のなかで、である。

『白縫譚』の最初の版元藤岡屋慶次郎は、明治十四年、戯作の出版と縁を切って、教科書専門の出版書肆に看板を塗りかえ、地本問屋の筆頭として自他ともに許した甘泉堂泉市は、明治十五年から、漢籍の大規模な覆刻に専念する。しかし、個々の版元の努力にもかかわらず、活版印刷術の普及と新聞雑誌ジャーナリズムの登場とは、木版印刷技術の上になたつ書物問屋、地本問屋の組織を解体させ、絵草紙屋、貸本屋の配給回路を断ち切った。

(前田愛「明治初期戯作出版の動向」『近代読者の成立』)

あえてくずし字で書かれた書物などは顧みられるものではなく、ややもすれば潰しにかかられ、埋もれ消えていくものであったことに思いを至さざるを得ない。他人にもものを見せるといのは、その見せる相手が同じ志向でない限り、お節介きわまりないものであらう。ましてや、古き時代の、しかも当時見向きもされなかったものに価値を見いだし開陳しているのだ。この志向は、言うなれば「数奇者」の伝統に位置づけることができようか。

### 「数奇」の伝統

「数奇」とは「好き」と同源の言葉で、「風流・風雅の道。和歌・茶の湯・生け花など、風流の道を好むこと」と辞書レベルで解説される。その数奇者の生態を如実に物語るのが次のエピソードである。

加久夜の長の帯刀節信は数奇者なり。始めて能因に逢ひ、相互に感緒有り。能因云はく、「今日見参の引出物に見るべき物侍り」とて、懷中より錦の小袋を取り出だす。その中に鉋屑一筋有り。示して云はく、「これは吾が重宝なり。長柄の橋造るの時の鉋くづなり」と云々。時に節信喜悦甚だしくて、また懷中より紙に包める物を取り出だす。これを開きて見るに、かれたるかへるなり。「これは井堤の蛙に侍り」と云々。共に感歎しておの

のこれを懷にし、退散すと云々。今の世の人、嗚呼と称すべきや。（藤原清輔『袋草紙』平安時代後期歌学書）

互いにみせあう鉋屑と蛙の干物。「今は富士の山も煙立たずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける」と紀貫之「古今和歌集仮名序」の一節にある。いまは朽ち果てた長柄の橋の、あの仮名序に載る長柄の橋の鉋屑であつた。同様に、井手の蛙と言へば、歌を詠むものなら誰しも知る歌語であり、その干物をいま目の当たりにしているのである。歌よむ者にとつて、あこがれのものであり、憧れの長柄橋、あこがれの井手の蛙であつた。特に失われたもののへの憧憬の念は強い。

長柄の橋の橋柱にてつくりたる文台は、俊恵法師がもとより伝はりて、後鳥羽院の御時も、御会などにとりいだされけり。一院の御会に、かの影（注―人麻呂影供）の前にて、その文台にて和歌披講せらるなる、いと興ある事なり。

例えば『古今著聞集』に記されたこの文章の語るのは、希有な一時を過ごすことのできた喜びの姿であつたろう。あの長柄の橋の橋柱でつくられた文台の置かれた御会だつたというのだから、その興趣の程は並大抵ではなかつたに違いない。

さて、淡島寒月が露伴たちに西鶴作品を見せたのも同様の嗜好であつたとは言えないだろうか。

私には江戸文学趣味は、ほんの一部、他にいろいろな嗜好がありました。西鶴熱の盛んな頃に、一面に好古小録的の嗜好、即ちズット古い処の骨董趣味もありました。これは父の感化で、父は古い奈良朝物などの好古家でした。私にもこの癖があるのは偶然ではありません。（淡島寒月「耽奇談」）

父親淡島椿岳の骨董趣味を寒月は受け継ぐものであつたが、椿岳も、当時古物の生辞引ともいわれた玉川鵜飼三二の趣味の延長線上にいる人物であつた。

当時古物の生辞引ともいわれた玉川鵜飼三二氏は、新らしく手に入れた古物をば、必らず持廻つて知人間に見せ

誇つた物で、別段売わけではなく、こんな珍品を知つてゐるかいといつて話の種を蒔いたものだ。鵜飼玉川をば父も兄といわれしほどで、鉄斎翁も、神田孝平、相木探古、蜷川氏なども皆その説を聴いたものだ。

鵜飼氏がかく趣味家となられたのも、元は當時有名な浪花の骨董家兼葭堂に薫陶されたもので、若い時分に浪花の兼葭堂へ始めて行つて、庫に案内されて一丈五尺乃至二丈の斑竹を見て驚かされ、例の売茶翁の煎茶器を悉皆集めておられたほどで、当時の趣味研究骨董家としては有名な一人で、或る江戸の人が訪ねた時に、江戸中の筆屋の軸紙を残らず張り集めてあつた由。（略）鵜飼玉川も実は兼葭堂に導かれたもので、或る時奈良に古物など探りに出かけた。（淡島寒月「趣味雑話」大正七年二月『大供』第一号）

鵜飼老は、新しく入手した古物を、持ち廻つて知人達に見せ自慢した。こうした古物蒐集が上方で著名な木村兼葭堂と繋がつてきたことも大變興味深いのだが、ここではこんな珍品知つてゐるかいと言つて話の種子を蒔いたという表現に注目しておきたい。「話しの種」とは『西鶴諸国はなし』にも出てくる言葉であるが（「世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ」同序）、人と人との繋がりを結ぶときに、その場での話題として呈示されたものであつた。

木村兼葭堂に限らず、博物的な集いの場合は、江戸時代から数多くあつた。たとえば山崎美成や曲亭馬琴など好古の士によつて文政七年（一八二四）の五月から続けられた「耽奇会」という集まりなどもその代表的なものである。耽奇会では、会員が持ち寄つた珍品奇物を展覧し、互いに品評しあつてゐることを、遺された記録『耽奇漫録』から伺い知ることができる。

その集いに「―会」という命名を施し、記録を残すかどうかは別として、モノを介して人々が集い、そして自身の持参したものを見せる。単に見せるだけではなく、その場での話の種をまくことで、集う人々との間に共有意識を生じさせる。寒月自身の行為も、そうした行いの延長線上にあるのではないか、と考へてみたいのである。秘匿するの

ではなく、むしろ話の種をまくことに価値を見いだした人々が確かにいたのである。

### 「稀書」として

何も高価なものを見せ、ひけらかしているわけではないことにも留意しておきたい。当時の書物を巡る状況について、水谷不倒は『明治大正古書価之研究』（昭和八年一月、駿南社）の中で次のように述べている。

洋学流行といへ、学者文士、当時の基礎学は依然として儒教であつたから、漢籍の打撃は、まだ／＼軽い方。国文和書殊に娯楽文学の小説等に至つては、征服された奴隸の如く、虐待を受けた。（水谷不倒同書「明治最初の十年間——古書の受難期」）

新政の余波と、初期の洋学偏重などのあおりを喰つて、和書が壊滅的な打撃を受けていた。寒月が西鶴を蒐め始めた頃は、水谷不倒の言う「明治十五六年頃までは、まだ／＼古書を弄ぶものなど殆んどなく、依然として無価値時代を続けてゐた事は云ふまでもない」（同書「明治最初の十年間」）という風であつた。それを踏まえるならば、つぶしにかかられる古書群の中から、寒月によって「かつて聞いたことのない珍らしい」「赤裸々に自然を書いた」「人間そのものを書いた」西鶴作品が、拾いだされたことになる。西鶴をはじめとする江戸時代の小説本の、古本の値段が最安値であつた時期が、寒月の「西鶴」蒐集の時期に丁度合致していたとは、何と奇妙な巡り合わせであらうか。当時、寒月は二十三、四歳。若き愛書家ビブリアフィによる「西鶴」本との邂逅が、その後の近代文学への影響をもたらしたことを思わずにはいられない。寒月は言わば屑のなかから西鶴を拾い出し、評価し、人に伝えたのであつた。そのきっかけがこれまで述べてきたように『骨董集』であつたとすれば、文字通り綱渡りの救出劇だったのだろう。何に価値を見いだすかは、分らないものだ。

それにしても「稀書」とは一体なんだろう。

発行部数の少なさ、それも稀書だろう。残存の少なさ、それも同様か。しかし、「大八車に満載した書籍」「何貫何百文といふ端銭で売飛ばされ」ている一山の中から、その価値を見いだす存在があつて、はじめて「稀書」は稀書として見出されるのではないか。捨てられ去るものへの眼差しを忘れぬことが、発見へと繋がる。モノが次々とつぶされ、失われて行くなかで、古きものへの憧憬の念が、時代の潮流に反して価値を見いだしていく。当時それは、何も書物に限ったことではなかった。

明治の末年には山中共古、坪井正五郎らを会員とする「東都掃墓会」という街のアカデミーも存在し、『見ぬ世の友』という機関誌を出していた。また「墓ばかり調べている人」の集まりとして大槻如電を中心とした「探墓会」があり、考古学者、歴史学者、古典研究の篤志家が加わった（山口昌男『内田魯庵山脈』）

考古学・歴史学・古典研究といった枠組みは、そもそも何も相互不可侵のものではなかったはずだ。ここに挙がる東都掃墓会の賛助会員を確認するに、杉浦重剛、宮崎三味、饗庭篁村、斎藤緑雨、野崎左文、幸田露伴などが名を連ねている。墓を探すことと、その作品を鑑賞し評価することは、ゆかしき人への哀惜の情をそぐこと、すなわちその「人」を知る点で等価であり連動する営為だったのである。研究対象を学問領域の名に泥み、狭い範囲で考えるようになった今日の我々自身の方が、実は隘路に陥っているように思えてならない。冒頭掲げた西鶴墓への掃苔も、まだ東都掃墓会成立以前であつたけれども、露伴や紅葉にとつては、——無論、南畝や馬琴にとつても——至極自然な姿、ゆかしき振る舞いだったのではあるまいか。

もう一つ、明治三十九年十一月に創刊された『書画骨董雑誌』を例にとろう。この雑誌は、当時日本文化研究に関する総合的な研究誌として位置づけられていた。その大正五年七月号に掲載された竹内久一の伝などを確認するに、文学や歴史、美術などといった今日の枠組みを越えた巨視的な繋がりを感じずにはいられない。竹内久一は元東京美



術学校教授で古社寺院保存会委員、のちの東京芸大設立に関わった木彫界の人物であったが、その伝記の掲載は、竹内の没したことを顕彰してのものであった。そこに登場する人物等に特に注目したい。一部抜粋しておく。

(五) 元禄会の事 前にも先生の骨董趣味に就いて一言して置いたが、先生が骨董趣味に入つた第一は山東京伝の骨董集から知識を輸入したのださうである。それで当時の好事家として松浦武四郎先生宅などに同好のものが相寄つて今の考古学会のやうなものを組織して色々古物の研究をやつて居た。其の人々の中に柏木貨一郎、永井十足といふやうな人も居つたさうだ。併して先生は是等の人々の会合が余り學術的に流れて高尚な会であるが趣味が乏しいといふので、矢張京伝の骨董集や種彦の還魂粹料式の会を造り度いものと考へた。然るに時恰も柳亭種彦の流れを汲んだ人で篠田千果といふ人があつたので、先生は此人や彼の玩具博士として一世に数奇の名を馳せた清水清風や畠山是真、山崎美成と云ふやうな人々と共に尚友会といふ趣味の会を造つた。併し世間では此会の事を元禄会と呼んで居た。のち会名を探古会と改め、探古小集とも呼んだ。今日の集古会が、恰もその流れを汲んで生れたものである。

此会を元禄会と呼んだ訳は、元禄趣味のものや義士に因んだ物などを多く集めたからださうである。仮名垣魯文などといふ人も此会に能く尽力して居た。

淡島寒月同様、竹内久一も『骨董集』の影響を受けていたと言う。久一の希求した「京伝の骨董集や種彦の還魂粹料式の会」に集うたのは、玩具研究の清水清風、戯作者の篠田仙果、仮名垣魯文といった面々たちであつた。その緩やかな集いこそ、高尚で學術的な集いとは異なる理想的な「趣味」の世界であつたのだろう。その流れを汲んだとされる「集古会」は明治二十九年に創立された会で、その会報『集古會誌』(のち『集古』)は、昭和十九年まで脈々と続き、蔵書印譜や稀覯書の紹介、伝記資料の翻刻などを掲載し続けている。「一見無用に似たる此種の会が學術上亦決して輕視出来ない」と、内田魯庵も大正九年四月『集古』誌上で称している程などである(この「集古会」につい

ては、後日考察してみたい）。無用のものに「用」を、価値を見いだす趣味の世界が、このち果たした役割は計り知れない。

### 明治の「古本」事情

偶然にも西鶴本という「稀書」を得たのは寒月であったが、明治から大正へという時間の推移は何をもたらしただか。最後にその点に触れておこう。一言で言えば急速なまでの稀書高騰ということに尽きるであろう。古書価格の変遷について確認するには、古書肆の目録類や水谷不倒『明治大正古書価之研究』などに付くことから始めなくてはなるまい。以下、水谷論からの引用を織り交ぜながら、その全体像を整理し鳥瞰しておきたい。

不倒に拠れば、「維新当時江戸では、大八車に満載した書籍が、何貫何百文といふ端銭で売飛ばされ、大阪でさへ、八文字屋ものなど軟派の珍書が、漉返しに材料に潰され」ていた。「明治十五六年頃までは、まだまだ古書を弄ぶものなど殆んどなく、依然として無価値時代」が継続し、そのことは古書価に反映していたのであった。「ある特別の事由あるもの以外、大概一部僅に十銭台に彷徨」するばかりで、「西鶴も八文字屋も、名所記も読本も、同じやうに挿絵があつて、五六冊の冊数のものなら、何でも一部何十銭といふ低い価格で扱はれ」ており、「名所図会の如き、厚冊重量のものが、幅を利かせてゐ」たという。「判で押したやうに、数量で許価されるものばかり」に高価がつき、まさに十把一束という扱われ方に過ぎなかった。しかし、明治「三十四年になると、西鶴は勿論、浮世草子の何たるを問はず、一円以上となり、急に三四割の騰貴を見るに至り、其後は年々鰻登りに、少しづつではあるが、書価は昂騰を続けて行つた」というが、その原因については不倒も「其原因が何にあるかは、詳しく解らない」とする。例えば「好事家間に、珍書鑑賞が盛んになり、古書を集める人が、段々殖えた事」を、古書価を高める一因と推し、「珍

書鑑賞の流行は、当時各方面の蔵書家が、古書展覧会を開催し、古書に封する知識の啓発に資した事に帰せねばならぬ。即ち古書展覧会の流行は、やがて珍書熱を煽り、それが古書価に影響したといふことになったのであらう」と一応の推測をしているのである。

秤売りされ投げ売りされた状況から、明治三十年代以降の急速な古書価の高騰へ。いま、そのことを追認するため、西鶴本の価格変遷を、淡島寒月や水谷不倒、三田村鳶魚などの発言から具体的に確認しておきたい。(一)内は上記諸氏本文の引用、《》はその引用文献である。

○明治十年頃：『西鶴置土産』五十銭（私が明治十年頃に、好古堂から『西鶴置土産』を買った時は、その価僅かに金五十銭であつた。《淡島寒月「古版画趣味の昔話」大正七年一月『浮世絵』第三十二号》）

○明治十三、四年頃：西鶴『好色一代男』一円（二十二、三歳の頃―明治十三、四年頃（略）この頃『一代男』を一円で買ったものであるが、今日でも千円はしている。思えば私は安く学問をしたものである。《淡島寒月「明治十年前後」大正十四年三月『早稲田文学』二二九号》）

○明治二十八年：西鶴『好色一代男』一円五十銭（西鶴の『二代男』が八冊で二十八年に一円五十銭、『五人女』が五冊で三十五年に四円といふ有様《三田村鳶魚後掲記事、昭和八年五月十七日『時事新報』》）

○明治三十二年：西鶴本一円台（三十二年までは、西鶴本が漸く一円台、八文字屋ものは五六十銭：略：然るに三十四年になると、西鶴は勿論、浮世草子の何たるを問はず、一円以上となり、急に三四割の騰貴を見るに至り、其後は年々鰻登りに、少しづつではあるが、書価は昂騰を続けて行つた。《水谷不倒『明治大正古書価之研究』昭和八年一月刊》）

○明治三十五年：西鶴『好色五人女』四円（西鶴の『二代男』が八冊で二十八年に一円五十銭、『五人女』が五冊で三十五年に四円といふ有様。《三田村鳶魚後掲記事》）

○大正七年：西鶴『好色一代男』四十五円（私の蔵書の一であった西鶴の『好色一代男』は、かつて紅葉、露伴諸氏が私から借りて写し取られた古本であったが、さきに私が金八円で売払ったものを、近頃四十五円で大阪にて売れたそうである《淡島寒月「古版画趣味の昔話」》）

○大正十三年：西鶴『好色一代男』千円、『好色五人女』千五百円（第三期になると、メッキリと高くなり、大正十三年には『二代男』が千円、『五人女』は千五百円になった。《三田村鳶魚後掲記事》）

○大正十四年：西鶴『好色一代男』千円（二十二、三歳の頃——明治十三、四年頃（略）この頃『二代男』を一円で買ったものであるが、今日でも千円はしている。思えば私は安く学問をしたものである。《淡島寒月「明治十年前後」》）  
古書価の高騰はすさまじい。「稀書」がある種の投機の対象になっていくのである。趣味として見いだされた稀書という位置づけに、値が這入ることが何を意味するか。その稀書翫味の諸相については次回論じてゆくつもりであるが、その辺の事情を辛辣に批判している一人に三田村鳶魚がいる。

読まない蔵書家、殊に軟かい物を沢山に持つてゐる人、それは成金の連中にある。また根生ひの富豪と称せられる人々にもある。成金は富豪を真似たのもあらうが、色々な目的から江戸文学に親しまうとする錢なし共は、とても値段が高くて取り附けない。真に読まうとする者が隔離され出したのは、明治の末からであった。読みもしない錢あり等が何で買ひ集めるか、それは骨董と心得てのことだが、軟かい物が学問になった以上に、骨董になった方が喫驚は大きいと思ふ。漉返しにされたものが、桐の箱へ這入つて、鬱金の切れで包まれる取扱ひになった。丸で太閤様のやうな出世だ。世間がさうならなければアンナ値段は出て来ない。世間の待遇は其の相場が教へる。さうなると買つて置けば儲かると思つて、買占を計画したり、売つて案外な利得を取つた日本開闢以来の珍しい蔵書家もあつた。蔵書家の投機といふのは初年だらう。書物と名の附いたものが、漸うまであらうとは思ひも寄らぬ。書価の研究から時世の姿を読むといふのも此処だ。また何故に斯うなつたかと吟味に掛るのも別

の処からではない。(三田村鳶魚の文・昭和八年五月十七日『時事新報』)

鳶魚の文を読む限り、まるでバブル期の美術骨董品への投機に群がる人々のようにさえ思えてくる。古き書物はかくして高騰した。「鬱金の切れで包まれる取扱ひ」として秘藏してゆく「読まない蔵書家」を本稿で取り上げてゆく気持ちには毛頭ない。本稿ではこうした情勢のなかでも、古書肆を交えながらも「趣味」の集いを継続し、書物を巡って交流し、情報交換を果たしていった人々に眼差しを向けてゆきたいと思う。高騰した古典籍を相手に、人々はどうのようない集いを持ち、書物を翫味し、繋がっていったのであろうか(この稿未完)。

本文引用中、今日からみれば不適當とみられる書名表記もあるが、資料的価値に鑑みそのままとしたことを諒とせられたい。なお、本稿は、科学研究費補助金基盤研究C「明治期における近世戯作の享受に関する研究」(研究代表者山本和明・研究課題番号23520264)ならびに基盤研究B「近世上方文壇における人的交流」(研究分担者として参画。研究代表者飯倉洋一・研究課題番号22320048)の研究成果の一部である。